

オーガナイズドセッション「予測をめぐる科学と社会」

オーガナイザー：鈴木舞

セッション概要：

現代社会において、予測はさまざまな領域に深く浸透し我々の生活を規定しているが、こうした予測には、そのプロセスがブラックボックス化されている、科学と政治とのギャップ、予測の行為遂行性などいくつかの問題が存在している。

本セッションでは、現代社会を規定する予測という行為に焦点を当て、予測をめぐる科学技術実践の多様性とそれが社会に与える影響（さらにその逆）を解明することを目的とする。具体的には、予測の方法論(白川)、地震動(額綱)、台風(有賀)、社会シミュレーション(日比野)を事例とし、自然科学・社会科学でなされるさまざまな予測という活動の共通性と多様性を、歴史的観点も含めて明らかにする。さらに、予測が社会とどのように相互交渉し、いかなる問題が生じるかを領域横断的に検討する。

白川展之・奥和田久美

発表タイトル：予測の方法論の変遷，予測モデルの活用の際に生じる課題

額綱一起

発表タイトル：地震動予測地図をめぐる論争

発表要旨：

地震の予知は不可能だが長期予測は可能という前提で地震動予測地図が 2005 年から毎年公表されてきたが、東日本大震災の長期予測の失敗を契機に、地震動予測地図をめぐる巻き起こった論争について議論する。

有賀暢迪

発表タイトル：数値モデルは（いつ）社会と出会ったか—台風進路予報の歴史から

発表要旨：

コンピューター（電子計算機）を用いた気象予測は、ENIAC（アメリカ）による最初の実験が 1950 年に行われてから急速に発展し、日本国内でも 1959 年には気象庁に大型計算機が導入されて、予報に使われ始めた。本発表では、この過程の中でも特に台風進路の予報

を取り上げ、コンピューターによる予測手法がどのように開発されたかをまず紹介する。しかしながら、この手法は確かに成功を収めたものの、数値モデルの計算結果がそのまま予報として発表されたわけではない。後段では、当時の予報業務の実際がどのようなものであったのかを文献資料に基づき紹介し、それと数値モデルとの、いわば距離感について検討する。

日比野愛子

発表タイトル：社会シミュレーションにみる予測の接続

発表要旨：

本発表では、予測の語りを発生させる装置の1つである社会シミュレーションに注目し、その中でモデルがどのように形成されているのかを明らかにする。近年、エージェントの振る舞いとその相互作用を措定するマルチエージェントシミュレーションに注目が集まり、工学、社会科学などの広範囲で使用されるようになってきた。しかしながら、実際の社会課題における実用化は防災計画や感染症対策の領域に限定されている。科学の実践から生まれる予測が、社会に接続するプロセスには、モデルの妥当性が重要であると同時に、予測言説を活用する組織システムの資源や文化が大きく関わっている。本研究では、感染症課題を中心として、マルチエージェントシミュレーションの活用事例を取り上げ、どのようにモデルが形成され、どのように働くか（あるいは接続に失敗して働かないか）を検討する予定である。